



くらもと・そう / 脚本家・演出家。2005年より開演となった北海道富良野市内のゴルフコースを舞台に「C.C.C富良野自然塾」を開塾。ゴルフコースの自然返還活動と、環境教育プログラムを展開している。

地球に暮らす ③ 自然と住まう

脚本家の倉本聰氏に「富良野自然塾」での活動を絡めながら、自然環境や地球と人の共存について話を伺う連載です。今回は人間の五感と自然の関係がテーマです。

五感と自然の関係を知らること

本来人間は5つの感覚「五感」を持っています。情報量の多い今、その多さに反比例して人間の五感も平面的になってきていると思います。例えば、富良野はラベンダーが有名で、観光客がたくさん訪れます。ラベンダーが「きれい」だから「見に」来ると言いますが、それは視覚だけの認識。写真と同じですね。実際のラベンダー畑を認識する場合、蜂がいつぱい来ているから羽音が聞こえます。それから風がラベンダーの香りとともに寄せて肌を打つ感覚があります。これで、少

なくとも4感で認識できるんですね。感覚が十分に使われなければ認識はすれ、誤解が生まれます。今聞こえる物音の数を数えてみてください。その後、目を閉じてもう一度数えてみてください。視覚を封じることと、聴覚が伸びるのがわかるはず。我々はいかに視覚に頼っているか、ということですね。そんな考えから生まれたのが、富良野自然塾の教育プログラム「裸足の道」や「闇の教室」です。裸足の道はおが屑や砂、丸太などの色々な素材を敷いたもので、そこを二人一組になって裸足で歩くプログラ



裸足で地面を踏みしめることは、自然と関わる基本の一步



冬の日の富良野自然塾のフィールド。この日は「森の幼稚園」を開き、子どもたちが存分に雪を堪能した



右/袖や長靴に雪が入って冷たい思いをしたり、滑ったり。五感で知ること知恵をつけていく 中・左/「森の幼稚園」では、子どもの自然への順応性が顕著に見られる



裸足の道。目隠しして風や足の裏の触感、音を楽しむ

ムです。一人は目隠しをし、もう一人が手を引いたり叩いて目隠しした人を誘導するという。足の裏の感覚なんて普段意識することはないけれど、視覚を覆うことで素材ごとの温度の差とか硬軟の感触とか、触感が浮き立ってくる。頬に当たる風の感触や木の匂い、仲間が手を叩く音も、印象深く感じます。

こうして、退化した五感を自然との関わりで蘇生させることが、このプログラムの目的なんです。乳幼児を対象にした「森の幼稚園」というものも聞いています。木に登ったり雪に触れたり、肌で自然を感じることで、人間が本来持つべき五感が育って欲しいですね。偏った感覚は、外界からの危険信号の察知も鈍らせます。以前富良野塾の丸太小屋が火事になったことがあったんですが、すぐ前で塾生が働いていたのに気がつかなかった。スタッフが来て「きなくさい」っていついてドアを開けたらわっと炎が広がったんですが、塾生はその「きなくさい」匂いを理解しなかつたんですね。

現代は記憶させて知識をつけることで脳を発達させようという傾向がありますが、本来人間の仕組みは体感することによって発達させるもの。数学や理科だって、元々は自然との関わりから生まれた学問です。大昔、チクリス川やユーフラテス川など、水辺に街が発生して文化が生まれましたが、その水を管理するために測量とか天体、数学が生まれてきたわけです。自然との関わりは、知識ではなく生きていく知恵をもたらします。現代人の、特に都市生活者の得る情報は視覚がメインですが、バーチャルではなく、自然のなかでの実践で情報を得る大切さを考える時期が来ていると思います。(談)